
超能力を喰らうモノ

左リュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超能力を喰らうモノ

【Nコード】

N9589X

【作者名】

左リユウ

【あらすじ】

星川左右吉は高校一年の夏休み、ある少女と出会い超能力を手にする。そして二学期。彼は突如転校してきた少女に少し困惑しながらも、その学園生活を送ろうとするが、しかし学園では、というよりも左右吉のクラスでは、無自覚能力者という不安定な力を持った能力者の影響が出ていた。そして左右吉はその能力者を突き止め、そして暴走能力と対峙する。学園能力バトル短編。パロディネタ有り。チート有り。

(前書き)

これは学園バトルモノです。
パロディネタ有り。

突然だが、俺、ほしかわそうきち星川左右吉、高校一年生は超能力者だ。

夏休み、ある少女に出会ってめでたく超能力者となってしまうとしたとさ。

よくある展開だ。

「ある日平凡な少年が謎の少女と出会った事により急に能力を手にする」。そのまんまだ。最早読者にとっては飽きている設定だろうが、飽きているという事はよく見る設定、という事であり、よく見る設定、という事は王道だ。

実際、それで人気を取っている作品があるのだから。

とまあ、そんなお決まり展開の如く、俺は夏休みに超能力を突然手にしてしまった。

最早どんなファンタジー展開だと最初はそりゃあ驚いたが、まあ何しろ手にした能力が能力だけに二学期である現在はまだ、慣れた。

これ以上は語るまい。

何しろその夏休みは決して、俺にとっては「休み」と呼べるモノでは無かったし、それに記憶には残っても思い出しには残らないであろう夏休みだったから。

そしてその件くだんの少女についてだが、それを語るのは少し待つて欲しい、と言いたい所だが、それは最早無理だろう。
なにより。

俺の目の前に居るのだから。

えーそれでは、転校生を紹介します。という決まり文句の言葉と共に、俺の今居る現在欠席者が三人も居る一年四組の教室に入ってきたのは、ロングヘアの髪を後ろで束ね、制服に身を包んだ少女。

「………月姫麻友、です」
つきひめまゆ

月姫麻友。

夏休みに出会った少女。

元能力者。

そう。元、だ。

今はその能力は無い。

それは、俺の所為だ。

夏休み。

俺の所為で、麻友の能力の大半は失われた。

普通の人間と、超能力者の間の存在。

いや、やや超能力者寄りなので、間、では無いだろうが。

そして麻友は静かに担任の教師の指示する席へと移動する。簡単に言えば、俺の隣の席。

クラス中で「可愛い〜」みたいな会話が聞こえるが、俺はそれどころではない。特にむさくるしい男子、もう少し落ち着け。

いい加減にしないと余裕ぶっこいてたら倒し損ねたサイバイマンの自爆に巻き込まれて死んだヤムチャの二の舞にさせてやるぞ。

そして昼休み。

展開が急とか言っつなよ。さっきも言ったが、何しろ短編なんだ。

この作者はダラダラと連載ばかりしていて短編なんか初めてだからな。ダラダラしない内にさっさと物語を進めるとしよう。

俺は昼休みになるや否や麻友を屋上に連れ出した。

そもそも、麻友は俺の家に居るはずだ。今の時間は。それなのにどうして急にこんな学園に転校してきたのか。

「で、どういう事だ」

さっそく、麻友を問い詰める。麻友は俺をその綺麗な瞳でじつ、

と見つめたまま、口を開いた。

「…………貴方の能力は危険。だから、私が見守る必要がある」
必要最低限の事だけを、話す麻友。

夏休みの時もそうだったけど、やっぱり今も思う。もうちょっと感情表現を豊かにして欲しい、と。

超能力とは、麻友いわく元々誰でも持っているモノだそうだ。ただ、それが覚醒（中二病的な言い方だが）するかしないかだけ。

そして偶然、俺の元々持っていた能力が、それだけ危険だったという話だ。

しかし、その「偶然」が、麻友の能力を失わせてしまった形となったのだが。

「そうか。ま、そりゃそうか」

「それに」

と、麻友は意味ありげに俺の瞳を見つめる。

「この学園には、既に超能力者が何人か居る。まだ自分の能力に自覚していない能力者が」

「はあっ!？」

それは…………大問題だろ。

そもそも、一般人の中に超能力者が紛れ込んでしまう事はあるだろう。それはあるだろう。しかし、一番問題なのは、自分の能力を自覚していないのが問題なんだ。

何しろ能力によっては暴走すれば一般人にも危害が及ぶ。それが

悪意が無かったとしても。そもそも、悪意の無い危険ほど、危険なモノは無い。

「だ、誰なんだよ。それ」

「解らない。無自覚能力者は、その存在を感知しづらいから・・・」

というより、俺にしろ、麻友にしろ、この調子だとこの学園は超能力者だらけになってしまいそうだぞ。割とマジで。

突然だが、俺は、友達が多い方ではない。

俺は周りと比べて学力は少し高めなのだが、高校はあえて離れた所にした。なんていうか、一人暮らしがしたかったから。それだけだ。本当に。

・・・嘘です。

本当は父親の転勤。ちょっとカッコつけて「一人暮らししながら高校に通う俺カッコイイ」みたいな気分を味わって見たかったんです。ごめんなさい。

でも一人暮らし、という部分は本当だ。

確かに父親の転勤という都合で引越した俺だが、すぐさま父親は更に転勤、というより海外勤務が決まってしまった。そして我が母親の方はというと「愛するパパの為ならたとえ何処へでもついて行くわ」 というノリで一緒に行きやがったぜあの野郎。

と、いうワケで今は実質一人ぐらい状態。そうでなければ、麻友を家で保護（ここをちゃんと察して欲しい。保護だぞ。保護。決してやましい気持ちは無い）したりは出来ないが。

話が脱線したが、まあとりあえず、俺には用するに友達があまり

居ない。なぜなら友達と離れてしまったから。
でもまあ、こっちに来てからも、友達は出来た。

一人。

「よう。真菜」

「おつ。左右吉じゃん」

「相変わらず小さいな」

「あア!?!」

俺の目の前には小学生かとツツコミを入れたくなるほどのサイズの同級生、幼児体形&ポニーテールの中後真菜だ。なかうしろまな出会ったのは俺がこっちの高校に来てからの入学式。

色々と会って仲良くなった、という経緯だ。それ以来、こっちの友達第一号としてそれなりに仲良くしている。
因みに俺は決してロリコンでは無い。

「こらこら。女の子がそんな汚い言葉を使っちゃ駄目だろ」

必殺なでなで攻撃。

こうすれば大体コイツは大人しくなる。

「あ、あう……い、イイ……」

「変なあえぎ声出すな!」

効果はばつぐんだ! でもばつぐんすぎた!

これがポケモンならモンスターボールで捕まえる前にオーバーキルしてしまった所だ。みんな、戦闘前のレポートは忘れずにな。^{セーブ}

「で、結局何かな？ ロリコンの覇者、左右吉」

「変な二つ名をつけてんじゃねえ！」

今ちゃんと釘をさした所なのに！ 俺はロリコンじゃないって！

「ああ、悪かったね。絶対ロリコン左右吉」

「絶対王者みたいなノリで言っなよ！」

「左右吉が絶対王者だったらゴキブリでも絶対王者になれるわ」

聞いたか？ 今の心の無い一言。

俺、ゴキブリと同列かそれ以下に認定されたんだぜ？

「それはさておき、本当に何の用？」

「いや、まあ今から大講義室に行って瀬名河^{せながわ}の手伝いをしようとして移動中にお前を見かけたから話しかけてみただけだ」

「わお。このロリコン」

「ロリコンじゃねえって言ってるだろ！」

「またまたあゝ。某学園都市最強のレベル五^{ファイブ}みたいにアクセロリータって呼ばれたいんでしょ？」

「お前いい加減にしないと男女平等顔面パンチ喰らわせるぞ」

「っーかお前、自分が幼児体形って自覚してるじゃねーか。そこら辺はどう思ってるんだ。」

「しかも某学園都市最強のレベル五ってモロに言ってるじゃねーか。いくら短編だからってやりたい放題パロってるとヤバイんじゃないのか？」

「大丈夫。私達には関係無いから。そういうめんどくさい事は全部作者の責任だし」

「うわ。コイツ恐っ。」

「それにしてもアンタ、やらかしたんだってね」

「？ 何をだ」

「美少女転校生を屋上に連れ込んでよからぬ事をやらかしたという噂だけど」

「やってないからね！？」

「いかん。つつい敬語になってしまった。これではますます怪しまれる。」

「ほほう？」

「やっぱり。コイツ全然信用してねえ。」

「友達に信用してもらえないって悲しすぎるだろ。っーかコイツの」

情報網は相変わらず広すぎる。まだ昼休みは終わってねえぞ。

「いやまあ、青春してるねえ」

「お前の青春の定義を是非とも知りたいな」

「青春ってホラあれでしょ？ 河原で不良同士が殴りあって最後に『お前、強いな。へへへ．．．．．』、『ああ。テメーもな。へへ』とか言って笑いあう事でしょ？ キモっ」

「お前の青春は時代遅れ過ぎる！ あと昔の人の青春をキモっとか言うな！」

そんな青春が実際に在ったのかはしらんが。

「あえて古いの言ってみたんだよ。聞きたい？ 二千十一年版の青春」

「参考までに聞きたいな」

「それじゃあ言うよ？ 簡単に言えばスマホで「ついーと」してからネットの某巨大掲示板で色々書き込みをしまくって情報を集め、そして某ゆるやか部活ライフ萌えアニメに萌えまくる事が現代版青春だよ」

「やめろ！ 確かに某ゆるやか部活ライフ萌えアニメは確かに学生にも人気を博しているが（ローソニアの時なんか高校生とぬいぐるみの取り合いじゃんけんしたからな。マジで。負けたけど）それが全てじゃないだろう！ 現代版学生をなめんな！」

「け おんは生きがい」

「言っちゃったよ！ モロ言っちゃったよ！ 折角「某ゆるやか部活ライフ萌えアニメ」って言う表現にしておいたのにっ！」

これ以上コイツと会話をしていたら時間がどんどん消費されてしまうので、俺はさっさと瀬名河の待つ大講義室へと向かった。

最後に言っておこう。

俺は某ゆるやか部活ライフ萌えアニメが、大好きです。

せながわめくみ
瀬名河恵。

委員長。

その影響力は絶大。

とまあ、これが我がクラスの委員長、瀬名河のスペックだ。

瀬名河は影響力がとてつもなく凄い。

成績は別に学年一番ではないが（それでも学年で常に十番以内に入る）、とにかく凄いのは影響力。現在超能力者の俺から言わせてもらえば、その影響力も、もはや一種の超能力だ。

俺は突然、昼休みに大講義室に來い、と（瀬名河の言い方は「来てください」だった）呼び出しを受けた。それというのも、今日転向してきた麻友についてだ（そもそもこういう事意外で、瀬名河とは接点等、一切無い）。

麻友の事についてだと言うのなら、行かないワケにはいかない。

俺は大講義室の扉を開けた。

長テーブルが並ぶ、広い部屋。そこにポツン、と。瀬名河が立って居た。

「あ、星川君」

「悪い。少し遅くなった」

「ううん。いいよ」

なんていい奴なんだ。

これがもしも真菜なら毒舌の一つや二つが炸裂していただろう。

「あの、さっそくで悪いんだけど、月姫麻友さんの事んだけど」

「おう」

「その、星川君と知り合いなんだよね？」

「ああ。そうだな」

それどころか一緒に暮らしているんですけど。

「そう。だったら、月姫さんが早くクラスに馴染めるようにサポートしてあげてね？」

やっぱりそういう事が。

こういう面倒見の良さが、瀬名河の影響力が絶大だという由縁だと言えるだろう。そしてその影響力は信頼から成り立っている。

「解ってる。まあ、アイツは感情表現があんまり豊かじゃないから少し保障はしかねるが」

「そう。でも、星川君なら大丈夫だよな?」

コイツは俺のどこをどう見たらそんな風に言えるんだ。

「そうだ。ついでもう一つ相談にのってもらっていい?」

「ま、俺でよければ」

「つーか相談だったんだな。さっきの。」

「あの……最近、クラスで三人ぐらい欠席者が出てるですよ?」

「まあ、そうだな。でも全員、ただの熱だろ?」

俺はそう聞いているが。

「そうだけど、でも、全員同じ日に、それも同じ体温で発熱している、って、おかしくない?」

「……それは知らなかったが、

「偶然だろ」

としか言い用が無かった。それぐらいしか、俺には理由が思いつかない。

「私の所為かも」

「はあ?」

何言ってるんだ。コイツは。

「だって三人とも、私と一緒に放課後掃除当番で残ってた三人だし
．．．．．」

「だから、偶然だろ。偶然」

とは言え。

おかしい。確かにおかしい。

瀬名河と一緒に掃除をした三人が。

次の日には欠席。

同じ温度で発熱し。

同じ日に欠席し。

同じタイミングで欠席した。

おかしい。

こう言っただおかしい事は多分、

「麻友、超能力の中で発熱を促すような能力は無いのか？」

「発熱、というより発火能力ならあるよ」

ドンピシャだよ。

いくら短編だからと言っても展開が早すぎるだろ。

そして俺は麻友に事のあらましを伝えた。

「それは多分、典型的な発火能力だと思う。だけど、それは普通ならば火や炎を生み出すだけの物。他の人に発熱を促すようなモノじ

やない」

だけど俺は知っている。

委員長、瀬名河のその影響力を……

もしも。

もしもその絶大なる影響力が、不安定な無自覚段階の超能力にも影響し、そしてその超能力の影響が他の三人にも移ったとしたら？ その仮説を、麻友にとりあえず話して見ると、麻友はその無表情な顔の中に、わずかな変化が見られた。

「……その可能性は、ある。まだ能力を自覚していない無自覚段階だから、能力自体も不安定だし」

「……やっぱりな」

まったく。影響力がありすぎだろ。委員長。程ほどにしとけよ。
……でも、仕掛けが解ったのなら、俺のやるべき事はただ一つだ。

「どうするの？」

「決まってるだろ」

食……うんだよ」

食後だが、別腹って事で。

放課後。

俺と麻友は、屋上に瀬名河を呼び出した。

そして率直に、瀬名河が無自覚に持っている超能力について、話

した。

「ちょう．．．．．のうりよく？」

「そうだ。今話した通り、お前には能力があつてその能力が現在欠席している三人の発熱を促している」

決して下がない、熱。

それを下げるには、能力を解除するしかなく、能力を解除するには、能力を安定させるしかなく、能力を安定させるには、自覚させるのが一番だ。

しかし、ただ自覚するだけで済むケースは少ない、らしい。

「ど、どうすればいいの？ 私．．．．．」

さすが委員長、と言った所だろうか。飲み込みは早い。それが例え異能の力であっても。

「簡単だ。まずはお前の中にある能力を、引っ張り出す」

「引っ張り、出す？」

そして麻友がすつ、と瀬名河の前に、立つ。

「月姫さん？」

麻友はただ無言で。瀬名河に、『触れた』。

ゴウッ！！ と、直後に、瀬名河の体から、炎が放出された。

月姫にかろうじて残されていた能力。それは、『能力の覚醒を促す事』。

つまり無自覚状態で眠っていた超能力を無理矢理引っ張り出す事。
炎はボウツ、と瀬名河の体から離れ、そして、一匹の鳥と化した。
火の鳥。

「こ、れは．．．．．？」

瀬名河がパクパクと口を動かしながら、説明を麻友に求める。

まあ瀬名河からしてみれば、急に自分の体が燃え上がって、鳥が出てきただけなのだから。

「これがアナタの能力の塊。能力の暴走していた部分」

麻友によって無自覚状態から覚醒させて引っ張り出す超能力は、その能力の暴走部分だ。つまり、この能力の暴走部分を倒してしまえば、瀬名河の能力は安定する、という算段だ。

「私の．．．．．」

「瀬名河、下がってろ」

「は、はいっ」

直後。

鳥が、俺にめがけてその鋭い嘴を向けて、突き刺すために空から急降下してきた。

「ッ！」

俺はバックステップをとり、かろうじて回避に成功する。瞬間、ボソッ！！と、屋上の床が砕けた。パラパラと破片が下の階に落

ちている。

今が放課後で本当によかった。多分昼休みに決行していたら騒ぎになっていた所だ（それでも明日は騒ぎになるのだろうけども）。

そして今度は、燃え盛るその翼を振るい、発火能力らしく炎を放出してきた。

広範囲に。

避けきれないぐらいに。

「ほ、星川君！！」

瀬名河の叫びとは裏腹に。

俺は右手を炎に向かって一振りする。そして、

バクン！！

と。

『炎を喰った』。

と、いうよりも。

『超能力を、喰った』。

まあこれが。

俺の、能力だ。

アビリティ・イーター
能力喰い。

能力を喰う能力。

夏休み、麻友の能力の大半を喰らい尽くした能力。

今の俺の体は、能力を喰らう事が出来る。

「さて、後は『お前』を喰うだけだな」

後は。

本当に。

喰らうだけ。

火の鳥は、そのまま下降する。

体を炎で包み、その持ちうる全ての能力を最大限に発揮し、俺に向かって突撃してくる。

この行動は、もはや能力の塊と化した能力に過ぎない存在が、俺の能力の恐さを感じ取った結果なのだろうか。

しかし。

その最大限に発揮した能力の上を、俺の能力は行く。というよりも。

喰らう。

ガッ！ と、俺は片手で火の鳥を、掴む。

そしてそのまま、バクンッ、と、火の鳥を、喰った。

まるで手の中に吸い込まれるように、消えるように、火の鳥も、何も、無くなった。

「ごちそうさま」

それだけ言って、後は何も無くなった。

俺は完全に、暴走する能力を喰らい尽くした。

後日。

瀬名河の能力が安定し、他の、共に掃除を行い、瀬名河から影響を受けていた三人の女子生徒は無事、登校してきた。

まあめでたし、だ。

ただまあ。

能力の存在を、麻友の転校初日から委員長である瀬名河に知られてしまった為に説明とかが色々めんどくさくなったワケだが。

でもまあ、あの夏休み、俺と麻友が出会った時の事は語らないでおいた。

何しろ俺はあまり話したくは無いし、なにより長いしめんどくさい。

「ともかく、これでこの学園に無自覚能力者は居なくなったんだよね。めでたしめでたし」

「？ 何言ってるの？」

「………はい？」

これはいかん。

ヤバイ予感しかない。

「まだこの学園には、無自覚能力者が何人が居る」

「………マジか」

今日も俺は、能力を喰らう。

（後書き）

駆け足でまとめて見ましたが、元々連載しようか迷った作品。とりあえずアイデアだけ短編として出して、気が向いたら連載します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9589x/>

超能力を喰らうモノ

2011年11月15日14時06分発行